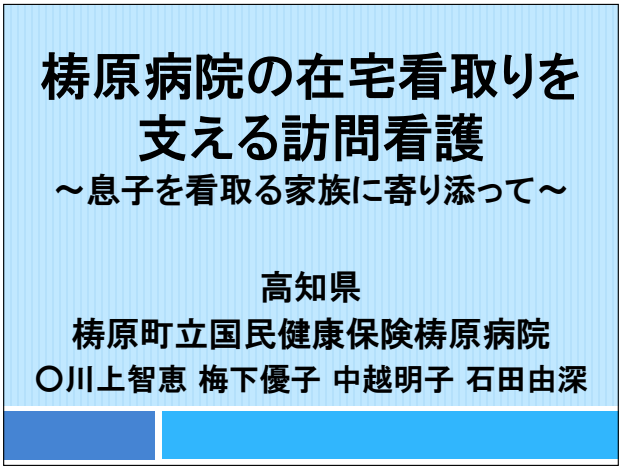
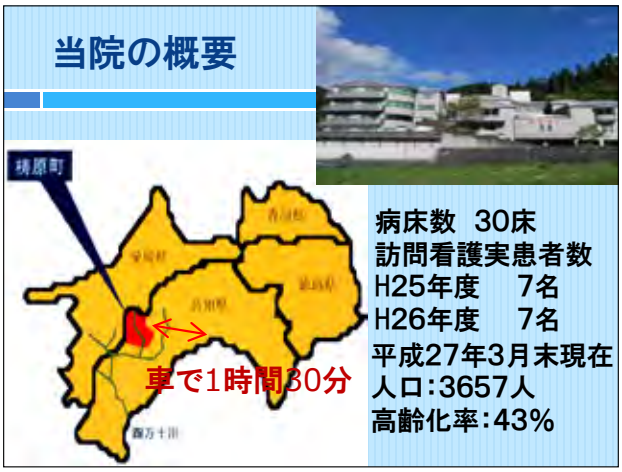
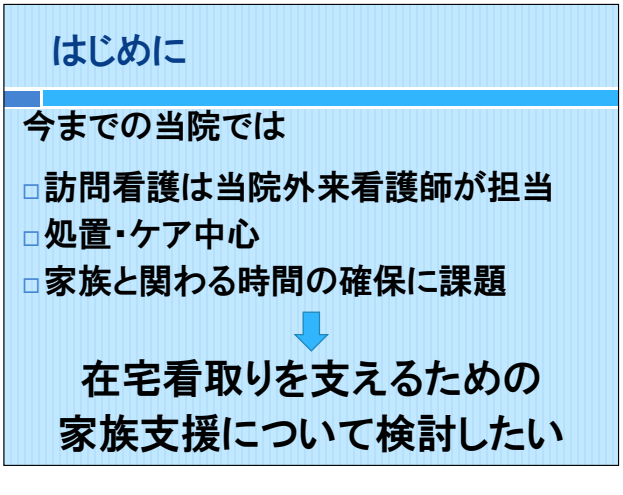
| 演題 129 | 梼原病院の在宅看取りを支える訪問看護 |
|---|---|
| | 発表者　川上　智恵（高知県　梼原町立国保梼原病院） |
| | 共同研究者　梅下　優子、中越　明子、石田　由深 |



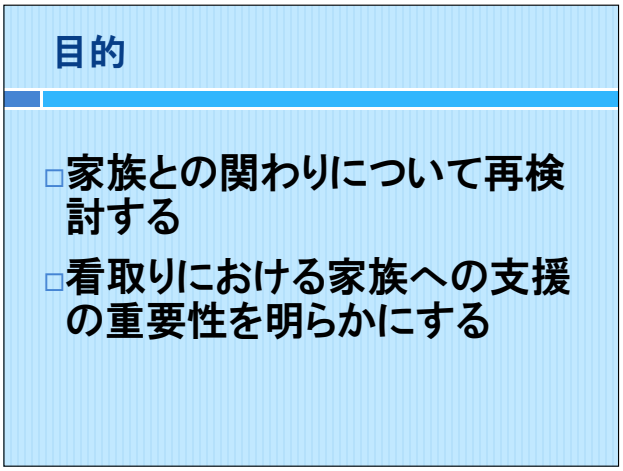

よろしくお願いします。
「梼原病院の在宅看取りを支える訪問看護～息子を看取る家族に寄り添って～」




当院の概要です。
梼原町は、高知県西部の愛媛県境に位置し、人口は3657人、高齢化率が43％の高齢化と過疎化が進む山間の町です。
当院は町内唯一の病院であり、他の病院を受診するには車で１時間以上かかる、中山間地域に位置しています。




はじめに
梼原町には訪問看護ステーションは無く、訪問看護は当院の外来看護師が担当しています。しかし、人員不足などで処置やケアを中心とせざるを得ず、時間的余裕を持って、ゆっくりと患者さんやご家族に接する事が難しかったです。
今回、外来通院から入院を経て在宅での看取りになった患者様の訪問看護を行った事により、家族への支援の重要性を感じ、在宅での看取りを支えるための家族支援について検討したいと考えました。




目的です。
家族との関わりについて再検討し、看取りにおける家族への支援の重要性を明らかにする。

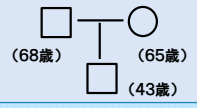
## 方法

**在宅での看取りを行った訪問看護の1例の振り返り**

方法は
　在宅での看取りを行った訪問看護の１例の振り返りとしました。

## 事例紹介

家族構成（3人暮し）




- 43歳男性
- 生後5ヶ月より脳性小児麻痺、全介助
- 意志疎通が図れるのは両親のみ
- 病名：膵臓癌による十二指腸閉塞
- 死亡約1ヶ月前より訪問診療・訪問看護開始
- 倫理的配慮：家族の同意を得ている

事例紹介です。
　患者は43歳男性です。
　生後５ヶ月より小児麻痺で43年間母親が主に世話をしてきました。
　平成26年12月末より嘔吐を繰り返し入院。
　検査の結果、膵臓癌による十二指腸閉塞と診断されました。
　外来通院を続けていましたが、２月25日より訪問診療・訪問看護開始され、３月10日永眠されました。

## 訪問看護師の関わり

| 従来の訪問体制 | 変更後の訪問体制 |
|---|---|
| 看護師単独 | 看護師＋医師など複数での訪問 |
| 1回1時間程度の訪問 | 最大2時間程度まで時間延長 |
| 身体的ケア中心 | 身体ケア＋家族のサポートを強化 |

**思いの傾聴・支援が充実できた**

訪問看護師の関わりです。

　最初は看護師も１名で伺っていました。しかし、傾聴する中で、患者さんが病院・看護師がとても好きだった事・本当は毎日外来受診を希望していた事・看護師の声や話をよく聞いていて特徴つかんでものまねをしていた事を母から伺い、（クリック）医師・看護師が複数で訪問する事としました。
　複数で訪問する事で患者さんが喜んでくれたら、母親も満足を得られると考えたからです。
　訪問時に点滴の交換などのケア・患者さんへの声掛けなど行いゆっくりと時間をとり、患者さんの生い立ちや思い出話・両親の思いを傾聴しました。

　また両親に、慌てないで介護が続けられるように「心の準備」として、今後の起こるべき事態の予想や対応・処置の話をしました。

　訪問し傾聴する事で分かってきた気持ちの変化です。
　膵臓がんが分かってから父親は宿命だったと母親は受け入れがなかなかできず夢を見ているんじゃないかという思いがありました。
　そして、訪問を重ねるにつれ、父親は不安はない。ただ目を閉じた時に一緒におれるか立ちあえるかという不安はある事。
　母親はずっと頑張ってきてくれたので、もう頑張らないでもいいよと思う気持ちもある事。

　思いを口にすることにより、両親のお互いの気持ちが分かり色々話ができました。

　嘔吐の原因が分かって、だんだん覚悟もできたし、いい時間を持てていると話されました。

話を伺うにつれ、患者さんが生まれてから今までの43年間の思い出が蘇り、涙する話もあったけれど笑い声に包まれて話ができました。

この写真は美川憲一さんのファンの息子の為に、母親が手作りした膝掛けです。思い出の品を額に入れ飾っていました。息子さんへの深い思いを感じました。

## 結果

- 在宅での様子・息子への親の思いの強さを改めて知った
- スタッフと話す事によって「気持ちが楽になった」「椿原病院で良かった」との声が聞かれた
- 気持ちの表出によって病気を受容し、家族での時間がより有意義となった

結果です。

訪問を重ねることによって見えてきた在宅での親子・夫婦関係や、両親の思いの強さを改めて知りました。

家族が抱えている思いをスタッフに話すことで、「気持ちが楽になった」「椿原病院で良かった」との言葉が聞かれました。

また、家族が病気を受容できた事で有意義な時間を過ごすことができました。

## 考察①

- 首藤らは「終末期を迎える家族が看護師に求めるケアは家族の思いを傾聴し、ストレスや疲労を最小限にする。さらに意向に沿った支援を早期に計画することが重要である」と報告[1)]している

1)首藤悦子　弔問による遺族の「思い」から終末期を迎える家族が看護師に求めるケア（地域看護）P219－221

考察です。

首藤らは「終末期を迎える家族が看護師に求めるケアは家族の思いを傾聴し、ストレスや疲労を最小限にする。さらに意向に沿った支援を早期に計画することが重要である」と報告しています。今回、両親が身内や家族に話せない思いを看護師に打ち明ける事が出来た事で、両親のストレス解消や不安の軽減につながったものと考えます。

## 考察②

- 家族との信頼関係を確立でき、両親の思いを知り、家族への支援の重要性を感じた
- 残された時間を悔いの残らないようにしてもらう為に心の支援が重要である

関わりを通してゆっくりと話を伺う事により、家族との信頼関係を確立でき、ご両親の思いを知り家族への支援の重要性を強く感じました。

また、残された時間を悔いの残らないようにしてもらう為に、心の支援が重要であると考えます。

## 終わりに

- 今後の課題
  - ・時間に余裕を持った訪問看護
  - ・傾聴に努める
  - ・情報共有
- 今後増加するであろう在宅での看取りを支援するため、訪問看護の充実に取り組んでいく

終わりに。

この事例を通して、家族の思いの傾聴が信頼関係の確立にも繋がり、家族の思いを知ることの重要性を、深く感じた心に残る１例となりました。

そして時間をとって気持ちを傾聴し、寄り添う事の大切さに気づかされました。

今後の課題として、時間に余裕を持った訪問看護・傾聴に努める事・情報共有の強化が上げられます。

この事例で学んだ事を活かし、今後増加するであろう在宅での看取りを支援するため、訪問看護の充実に取り組んでいきます。

ご清聴ありがとうございました。